研究ノート

佐伯雑記（一）

増村　隆也

フイゴ

佐伯の歴史を顧みて最も古いのはフイゴであると思う。昭和二十三年十月下城遺跡の第二貝塚の中位層から発掘の際発見された完全な鎌形鉄製品の発見で、之が完全な形態をとどめて出土したのは本遺跡の吾国で初めてである。下城では鉄を鍛えたであろう台石、フイゴ、釘、鉄滓等の製鉄遺跡としては完全な形を具備したものであった。次で佐伯氏十代栂牟礼落城の主人公惟治が餅原監物兵衛に遺わした文書に、

畑津並三郎尉持車塩月肥後守持にまかせ杢持多々良可遣候、恐々謹言、

と言うのがある。茲に多々良と言うのはフイゴの事である。「言海」によると多々良はフイゴの大なるもの、足にて踏みて空気を送る大きな鋳物に用いるものと言う、鉄等を鋳するに用いたフイゴである。このフイゴを何の為に使用したかはつきりしないが、約二千年前のフイゴの発掘を惟治の書いた多々良とは時代は違うが、何か関係がありそうである。

惟治は文明十七年（1485）の生れで大永七年（1526）三十三才で死している。この文書が何年に書かれたかは判らないが1485から1526の間に書かれたものである事は確だ。二千年の昔から約四五〇年前の昔迄フイゴと言うものが伝っている。このフイゴは果して鉄等を溶すのに用いたものか不明であるが、佐伯地方には鉄鉱と言うものが出ていない。明治の時代に書かれた「新佐伯」には佐伯の産物としてマンガン銅を挙げているが鉄鉱は書いてない。何れからか輸入して鉱石を溶したと考えなければならないが、果して何れから輸入したかは判らない。

佐伯地方の上代文化

上代の文化を物語るものは先住民族の遺跡より他にない。昭和二十三年（1948）余の主催した佐伯史談会の後援で九大教授鏡山氏（九州考古学会長）の指導のもとに、佐伯市長谷の下城遺跡の発掘を行なった。斯る大々的発掘は大分県では初めての企てであった。其の結果は綜合すると、

(1)　平地住居を発掘し下城丘陵一帯に弥生式土器文化民族が、集団を

なして住んでいた事。

(2) 他に類例のない完備した製鉄遺跡を発掘し、北九州地方と時を同じうして二千年の昔、佐伯地方に既に鉄の文化が入って来た事が判り、更に長良（ながら）遺跡から鎌を発掘した事から、之を裏書する事が出来た。長良は下城にあり。

(3) 貝塚の下層に炭化層を発見し、その炭火物から麦粒、薬の炭火したものを見出してその当時農耕を行なっていた事が判って来た。

(4) 貝塚から発掘した土器、石器、骨器等から当時の文化が弥生式のものであった事が明かになって来た。

(5) 下城、長良遺跡から石器の出土する事が少なかった。これは鉄の文化の輸入により石器が左程必要でなかった為と考えられ、石器文化から鉄器文化えの過渡器に当る遺跡と云う事が出来る。

この他佐伯には八幡（やはた）、川原木（かわらぎ）にも遺跡が発見されており、その出土品から弥生式の遺跡とされている。

佐伯の古墳文化

佐伯の古墳として久部山の石棺、大入島（おおにゆうじま）荒網代（あらじろ）東島の石棺、久部（くべ）東禅寺（とをぜんじ）の石棺、岸河内（きしがわち）権現鼻の石棺、長島山（ながしまやま）の石棺更に上城（かみじょう）光久寺の石棺が挙げられている。

これ等は皆竪穴石棺で、東島（ひがしじま）のものは箱型石棺で、東禅寺のものは舟型石棺である。久部山、権現山、光久寺のものはまだ発掘してないから不明であるが、長島山のものは寛政時代（1789—1800）「はぜ」の苗を移殖する時偶然に掘りあて、その中から古刀を得たが、祟りを恐れて再び元に納めて刀剣権現として祀ったものである。

この他未知の古墳が尚幾多もあると思われるが、既に知り得た古墳も発掘されたものは僅かに一個で古墳文化を研究する資料を提供していない。

弥生村小倉の裏山にある約八十個と云われる横穴古墳からは、既に土器、金環、刀剣等の腐飾したものが発掘されている、土器は祝部（いわいべ）式土器で破損のない壺と蓋（ふた）のある土器である。これ等は大化の改新（645—649）当時の佐伯の文化を物語るものである。

神武東征の遺跡

佐伯には神武東征の遺跡と称するものが二つる。その一は畑野浦であり、その二は大入島の日向泊（ひうがどまり）である。

畑之浦には神武東征の時漿を入れるに用いたと云う古い壺が伊勢本（いせもと）神社の御神体として祀られている。初め壺は二つあったが一つは破損して棄てられ今は一つだけ祀られていると言う。

日向泊には神武天皇が自ら弓で堀ったと称する古井戸がある。この井戸は満潮の時は海底に没するが、潮が退くと清水（しみづ）がコンコンと沸いている。この井戸を神の井と云っている。日向泊の名も皇舟が日向から来て艇泊したからだと言う。

現在吾等の古代常識からすると、果して神武東征なるものがあったか否かが疑問で、之を肯定する学者と否定する学者がある。考古学者は神武東征を弥生式土器文化民族の東漸だと言っている。

伊勢本神社の御神体である古壺は氏子の話を綜合すると、弥生式土器であると思われるが、御神体である為に未だ拝観の栄を得ていないが、弥生式土器だとすれば考古学者の説を裏書するものと考えられる。

最近になって浦代湾の荒戸海岸に丸井戸と呼ぶ干潮時に清水の湧く所のある事を知った。伝うる所では東武東征の時水を求められた所と言う。

海部の海人

仲哀天皇の九年（200）神功皇后が三韓征代を行なった時、水軍の主力をなしたものは海部（あまべ）の海人（あま）であった。

三韓征代が終った後、その論功行賞に不満をいだいた豊前、豊後の海人（あま）は暴動を起し応神天皇の三年（203）朝庭はこれを鎮圧し海人部（あまべ）を置いた。この海人部が現在の海部郡と関係のある事は判るが、海人部がどこに置かれたかは記録に明らかでない。

然し海部の海人（あま）が三韓征代に海軍の主力になった事は事実で、その当時から航海術に長じていた事は明らかである。これは神話に天孫族とは別個に一大勢力を有していた海部族（あまべぞく）が航海術に長じ、所謂神武東征の時、その水先案内となった海部（あまべ）の珍彦（うづひこ）も海部族であった事から考えても、海部の者が航海術に長じていた事を物語るものであるが、これは神話であるから決定的裏付とする訳には行かない。

佐伯宿禰久良麿と佐伯

神護景雲元年（767）佐伯宿禰久良麿が豊後守に任ぜられている。この久良麿が穂門（ほと―佐伯地方）に住んだから佐伯と云う地名が出来たと豊日誌は書いてある。

この豊日誌の記事を史家は信じて佐伯宿禰久良麿が住んでいた為に佐伯の地名が出来たと書いて来た。然し豊後の長である久良麿が佐伯地方に住んだとすれば当時豊後の中心に戦乱か何かあって、そこに住まわれなかった為に佐伯地方に住む事になったと考えねばならないが、豊後国に就いて調べて見ると豊後には戦乱はなく、久良麿はその前後に豊後守となった人々と同様に、その任期四年の後、他に転任したことを考えると、久良麿が佐伯に住んだとする豊日誌の記事は誤りとな

って来るし、更に佐伯宿禰久良麿の住んだ為に佐伯の名前が出来たとする記載も誤りとなって来る訳である。佐伯の地名は日本書記七の記載から考慮すべきであろう。

佐伯の読み方

佐伯と書いて「サヘキ」と振仮名を付けたものが多い。日本書記にある景行天皇の時代に置かれた佐伯部は「サヘキベ」と読むのであるが、佐伯地方では佐伯と書いて「サヘギ」又は「サヘキ」とは読まずに、古くから「サイキ」と読まれている。

支那の本で豊後の事を書いてある最も古い本は胡宗憲（こそうけん）の部下であった鄭若僧（ていじゃくそう）が書いた寿海図篇（ちうかいずへん）である。これは明の章潢（しょうこう）が萬暦五年（1577）に書いた図書編より十数年前に書かれた本で倭国事略（わこくじりゃく）の中に豊後の要津として福乃、倭几奴法売、撒一基、烏四基等の地名が書いてある。

これは寄語と云って吾国の発音通り仮名で書いたのと同じで、福乃は府内（大分）、倭几奴法売は沖の浜、撒一基は佐伯、烏四基は臼杵である。撒一基の撒はサで、一はイで、麻雀をやる人なら一二三四で一をイと読むことを知っている筈である。基はキである。

この記録から見ると佐伯はサイキと天正五年（1577）頃から読まれていた事がはつきりして来る。佐伯駅の佐伯の振仮名も最近になってサイキと訂正された。今更議論の余地はなかろう。

海部公常山

続日本記に延暦四年（785）豊後国海部（あまべ）郡の大領（たいりょう）であった従六位上、海部（あまべ）公常山（つねやま）が功によって外従五位に任ぜられた記事がある。

これは佐伯地方の為政者で正史に記載された初めのものと思われ、それ以前の統治者に就いては明らかでない。海部公常山は上古以来の大部族であった海部族で、豊後の海部の直と同族で非常な勢力を有していたものと思われる。

豊日誌には海部公常山の子孫が代々海部を統治したと記しているが系図も文献も伝っていないから明らかでないが、延暦四年（785）常山が外従五位下となってから、天慶四年（944）佐伯是基（これもとー惟基）が佐伯院に襲来して、経基（つねもと）に擒にされ左エ門府に送られるまで約百六十年間は常山の子孫によって佐伯地方は支配されたものと考えて間違いないと思われる。

豊日誌には常山は佐伯宿禰久良麿（さいきすくねのくらまろ）の子としているがこれも誤記と思われる点が多い。天慶四年以後鎌倉時代の初期緒方三郎惟栄（これよし）の登場まで佐伯地方は、大野郡に起

きた豪族大神（おおが）氏によって領有されたものであろうが詳細は不明である。

王朝時代の佐伯の主都

王朝時代の佐伯の主都はどこであったか記録もなく、判っていなかったが、偶々大正年間関東地方に住居する屋久氏が古い先祖の位牌の裏に書いてある記事を見て、先祖の墓を尋ねて態々佐伯に来た事があった。その位牌の裏には佐伯城下を距る南二里の点で、一町上に登った所に八町四面の平地があり、そこで主従三十八人が討死してそこに葬ったと記してあり、表面には天安二年戊寅十月廿八日と戒名と共に記してあった。天安二年は海部郡大領海部公常山が外従五位下になった延暦四年（785）から七十四年後でこの三十八人の墓のある八町四面の平地が判りさえすればその北二里の点に当時の佐伯の城下があった訳である。私の調査ではこの八町四面の平地は青山村市福所（現在佐伯市）であると思われ、市福所の停留所から約一町上に登ると、八町かそれ以上の中央の凹んだ台地があり、その台地に連なる南に突出した丘上には潜龍と書いた大きな五輪塔と共に数多の五輪塔がある。その市福所から北二里の点は昭和廿三年の発掘で有名になった下城の台地である、唯二里と云っても大体の事であるかどうかが明かでないから或いは上城であったかも知れない。然し下城か上城の何れかが王朝時代の佐伯の主都であった事は間違いないと思われる。下城の発掘では多くの輸入土器の破片が貝塚の層から時代を追って出て来た。これも其の昔佐伯の主部であった事を裏書するものではあるまいか。

潜　龍

青山村市福所の停留所から約一丁右側の丘に上った森の中に大きな五輪塔がある。その五輪塔は甚だ稀に見る大きなもので佐伯地方にはこれ以上大きな五輪塔はなく、弥生村川股妙見神社の石段の右手の森の中にも大きな五輪塔があるがこれにより少し小さい。この将軍の墓にも匹敵する五輪塔の上部には潜龍と刻まれている。潜龍とは皇位を去って一時地に潜むことである。この潜龍の字は余り達筆でない所から後に彫ったものであろうと云われている。この潜龍と刻んだ五輪塔は一体誰の墓であるか。その五輪塔の傍には、約四十個の五輪塔がありその一部は後に集めたものであるが、これが天安二年討死した夜久氏主従三十八人の墓で潜龍と書かれてあるのは屋久氏の墓ではあるまいかとも考えられるが、未だ郷土史家の意見は一致していない。潜龍と書かれてある以上然るべき人の墓である事は間違いない。一時皇位を去って地に潜むと言う事から皇位と関係があるが、皇位を去って豊後国に下向して来た天皇があったとは聞いていない。郷土史には一貫した記録と言うものがなく或る時代には全く何の手がかりもない欠損

のあるのが普通であるが、佐伯地方でも約四百年の王朝時代の記録に欠損がある。この時代が解ってくると当然この潜龍と刻んだ塔の主も判って来る。潜龍は一体誰の墓であろうか。

熊　襲

景行紀に「十二年秋熊襲反きて朝貢せず八月己未朔己酉（十五日）筑紫に幸す」とあり熊襲と言うのは何処であるか疑問がある。

熊襲と云うのは土地の名と民族の名との両方から考える事が出来る土地の名儀から云うと古事記国生みの神話に筑紫島即ち九州は「身一にして面四つあり各面に名あり」と記し「筑紫国を白日別（シロヒワケ）と云い、豊国を豊日別と云い、肥国（ヒノクニ）を建日向（タテヒムカイ）、日豊（ヒトヨ）、久志泥別（クジヒネワケ）と言い、熊曽国を建日別（タテヒワケ）と云う」とあり。筑紫国は筑前、筑後。豊国は豊前、豊後。肥国は肥前、肥後、熊曽国は日向、薩摩、大隅に当っている。この地方をクマソと云うのはクマと曽の地方汎称であろう。現在肥後の南部に球磨郡があり大隅の中部に囎唹郡がある。囎唹郡は球磨川の貫流する山岳地方で景行紀の熊縣（クマノカタ）の地方に当り、クマは隅で山の隈の意味とも解せらる。ソオはソの延音であり、山の背の意味と解せられる。即ちクマソと云うのは今の肥後の郡部から日向、大隅、薩摩に至る地理的汎称と思われる。次に民族の名から言えばクマは熊の様に勇猛であり、ソは勇男（イサオ）の約言であり、クマソとは勇敢なる土人の意味であると考えられる。これは特別なる異民族とする考え方もあるが、日本民族と全然別系統の民族とするには論証資料に不足の感がある。これ等の二つの組合せからクマソと云う地名が起って、この地方の住民の称呼と転化したものと考えるべきである。

後藤著漢和大字典に熊蘇は古代九州南部によりたる原住民にて勢慓悍なり、久しく天孫人種に反抗す天孫と同種のものに非ず、もと南洋地方より渡来したるものならんかと記している。

祖母嶽大明神の神孫

恒武帝の時豊後国緒方荘に流されていた堀川大納言に麗わしい姫君が生れ成長と共に後宮深く育てていた。この姫のもとに人知れず毎夜通っていた若者があった。いつか大納言の知る所となって其は誰かと姫に問い質したが姫は其を知らなかった。母は若者が再び来たら狩衣に糸のついた針を刺し、その糸を頼りに若者の住所を突き止めて来いと姫に教えた。その夜訪れて来た若者に姫が問い質すと、若者は再び来ないからと恥じて住所もあかさず帰りかけた。姫はそれに追いすがり狩衣に糸のついた針を刺し、それを頼りに若者をつけて行った。遂に祖母嶽の岩屋に入っている事をつきとめた姫は、岩屋から出てこの

私に会って貰いたいと頼むと、この俺の姿を見ると驚くに違いないからこのまま帰れと返事があった。姫が更に頼むと異様な物音と共に現れたのは大蛇であった。姫の待女二人は驚きの余りその場に昏倒した大蛇は姫が妊娠しており、やがて男子が生れるから性を大神、名を惟基とつけよと述べ、更に蛇には鉄は禁物であるが姫の昨夜刺した針の為に今死する所だと云い残して消えて了った。姫は泣く泣く家に帰り弘仁三年男子を生み、御神託によって大神惟基と命名し、九州に比ぶる者のない偉丈夫であった。これは大神氏の先祖惟基を祖母嶽大明神の落胤とする伝説であるが、惟基は寛平四年（892）大野郡領となった大神臣庶幾（コレチカ）の子である。

十五夜姫

人皇廿五代鳥羽院の息女十五夜姫は己が意に叛く結婚を嫌って、梅永と呼ぶ乳母唯一人を供に召し連れ、都を落ちさすらいの旅を続け佐伯の浦に辿り着いた。それより姫は山路を越え日向に向う途中重岡村の小長谷（オハゼ）の坂にかかった時疱瘡に罹り高熱のため咽喉は渇き、なれぬ長旅路に疲れ果て、その坂に昏倒し息も断えだえに唯一杯の水を飲みたいと乳母に訴えた。乳母はせめて一杯の水を飲ませようと麓にかけ下り漸く一杯を求め得て、再び姫のもとに帰った時には姫は既に事絶えていた。乳母は悲歎に暮れながらも里に下り一人の寡婦に、

疱瘡を病む人でこの話を信ずる人はせめて一杯の水をその墓に捧げ疱瘡を癒すよすがにしたらよかろう。

と話した後近くの深い淵に身を投げて了った。乳母が一杯の水を捧げて急いで登って行った坂を一杯坂と言い、乳母が投身を決意して荷物を投げ捨てた淵を「荷かいが淵」と云い、乳母の身を投げた淵を乳母の名をとって「梅永淵」と名づけられた。この十五夜姫の墓は小長谷の「塔の様」と呼ばれる山の上にあって小長谷観音と呼ばれているが、観音の像はなく唯墓のみ残され疱瘡を病む者にあがめられていた。幕末の頃部落の某はこの墓を発掘して一箇の赤茶腕を得たが、誰云うとなくその祟りを恐れて所持する者もなく、再び墓前に置かれてあったが今は見当らないと云う。

弘法大師の霊場

鶴藩略史の本匠村薬師如来の項に「大同年中の創建にして僧空海の刻む所の木像を安置す是より先空海諸州を遍巡して大伽藍を建立するの地を求めて佐伯に来たり錫を留むること数年遂に仏院を残して去る」との記事があるが果して佐伯に空海は来たであろうか。本匠村には空海が笠をかけたと言う故事から笠掛と言う部落があり、小半の下には聖穴、聖岬がある。因尾では空海は日向の市畑から川原木を経て因

尾に来て塔の原に塔を建て、その先の奥の院と呼ぶ所から更に奥にあり井の口に長く滞在し、薬師如来を彫ったと言われている。奥の院から八町下の花立から奥には約七十年前迄は女は一切登ることを禁じられそこに花を立てて帰っていたという。奥の院には大伽藍建立のため大きな石で屋敷取りした跡があり奥の院の下には寺屋敷と呼ぶ所が道の両側に幾つもあってそこに長楽寺がある。この因尾の霊場には谷が九百九十九あって千に一つ足りないから仙人は住まわれぬと云って、今の高野山に霊場を作ることになったと云っている。又弘法大師が入浴の時衣をかけたという岩に触れると腹痛を起すとか。長楽寺の如来に供えた水を田の中に入れる、とヒルが一匹も居ないとか言われている。なお佐伯には弘法大師の霊場として堅田の常楽寺、蛇崎の聖神社がある。聖神社の例祭が弘法大師の祭と同じく三月二十一日となっている。多分弘法大師を祀ってあるのであろう。

常　楽　寺

堅田川の清流に沿って歩を進めると、左側の波越（ナンゴウ）の小さな岡の上に常楽寺と呼ぶ庵がある。本尊の千手観音は稀に見る大きな座像で、顔は普通の観音に見るような柔和なものではなく寧ら恐ろしい感じを受ける古い仏像である。そのお戸帳の金爛は竹に佐伯氏の紋、御鱗が図案化されており、佐伯惟治が大永七年(1527)栂牟礼落城の時奉納した陣羽織だと云い伝えられ、お戸帳の裏の白絹には墨痕鮮かに大壇君と記されている。これは惟治の奉納した意味であろう。豊薩軍記等には天正十四年佐伯惟定が堅田の野に島津の大軍を撃破した時、この観音の白のお戸帳を貰い受けて旗にし、凝兵を置いて薩軍を府坂峠に追いやり大勝した事が書かれている。この本尊の厨子の横には朽ち果てた弘仁仏体が立てかけられており、応永二年（1395）の板碑や文安四年(1447)寄進の顎口が寺内に保存されており、庵の近くには応永二年全三十三年と刻んだ五輪塔がある。又近くには金剛山我浄寺の跡がありその附近一帯には幾多五輪塔がある。多分その昔この地には大きな寺院があったものと思われる。応永二年の板碑の裏には、

応永二午亥歳十二月吉祥日
六世現住玄陽謹寄附之
仏徳山　常楽寺　□　□

と記してあるから、この寺の創立は鎌倉時代初期と考えても誤りではないと思う。

長楽寺薬師と常楽寺弘仁仏

因尾の長楽寺には、弘法大師の刻んだと云う薬師如来が祀られている。この仏像は三重に成っていて其の重ねてある仏像を一重ずつ取り除いて行くと最後に弘法大師作と云う一寸五分の薬師如来が入ってい

ると云う珍らしい仏像である。この御本体は誰も拝んだ者はなくその外被となっている仏像も久しく開帳のない為に拝する事もないが金色燦然と光り輝いている由である。かつて大友宗麟が神社仏閣を焼却し仏像を焼いた時この仏像も焼かれたが、焼け残りを川に投げ込むと川上に向って流れたと云う口碑がある。この長楽寺と名前が似通った寺に下堅田村浪越（ナンゴウ）の常楽寺がある。常楽寺の本尊の厨子の横に朽ち果てた立像は、高さ三尺位の木の素彫りで甚だしく蝕み耳鼻は落ち手足はもげ完全な形をしているものは一体もない。かつて同寺を訪ずれた新納文学博士はこの三体を見て間違もなく弘仁仏で四天王の内多聞天、増長天、持国天であり、然るべき名匠の彫刻で破損がなければ国宝であると措しみ、四天王として他の一体と共に大伽藍の内に安置されていたものであろうが今一体がどこかにある筈だと云った由である。この仏像三体は佐伯に於ける最も古い仏像であるが余り世に知られていない。この弘仁仏は弘法大師の佐伯に来たとする伝説と何か関係があるように思われないでもない。

聖の彫刻

昔堅田の武石家に突然と訪れて来た一人の法師があった、法師は暫く間武石家に滞在していたが、法師は奥の座敷で唯然々と何事かをしていた。家人は一切その室を隙見せぬように断られていた。幾日かは過ぎた、然しそこには法師の居る様子もなかった。不思議に思って裏の部屋に入って見るとそこには二体の仏像が残されてあった。家人はその仏像を崇め家に祀るのも勿体ないと一体を或る神社に一体を某寺に祀ったと云う。果してこの法師は誰であったのであろうか。何か常楽寺弘仁仏と関係があるように思われるが想像に過ぎない。

本匠村長楽寺、堅田の常楽寺、武石家の記録、蛇崎の聖神社、本匠村笠掛、小半の聖穴、聖岬、本匠村の塔の原、奥の院、井ノ口、寺屋敷、花立、薬師如来、常楽寺の古仏、黒沢の奥の市畑と挙げて来ると何か弘法大師と佐伯は関係があるようにも思われる。弘法大師は讃岐の佐伯氏の出である。然し大師の霊場は全国的に散在している事だから研究の余地があろう。真偽の程は別として記録によると佐伯には弘法大師作と云われるものに大日寺大日如来、梶寄大日寺末岐の地蔵、本匠村瑞祥寺の薬師、唏于大日寺末庵の地蔵、養賢寺の地蔵等がある。

大神氏

延暦四年（888）豊後介に任ぜられた外従五下大神朝臣良臣（あそんよしおみ）はその翌年豊後介に再任せられ、その任期四年が過ぎて豊後を去る時、百姓等は良臣を慕いてその子庶幾（これちか）を留めて貰いたいと良臣に頼み、良臣はその希望をいれて庶幾を大野郡領に残した。この庶幾の子が惟基（これもと）で大神氏の祖である。惟基

は伝説では祖母嶽大明神の子であるとしている。惟基は偉丈夫で数郡をかすめ豊後にその権をほこり、その孫惟栄（これよし）の時代は益々盛んになり、豊後国はその一族により領有されていた。時殆かも平家全盛の時代で惟栄も平家に従い、重盛の従者となって京都にいたが平家の専横を悪んで豊後に帰り時の至るのを待っていた。その内平家は源氏に追われて九州に落ちて来た。惟義は平氏を九州から追い出し奉れとの国司の命令を、院宣と偽り九州の諸候に触れ、九州の大軍を指揮して、平家を九州から追い出し、更に義仲討伐の源氏同志の戦に時をかせいで、再び九州に勢を盛り返さんとした平家討伐に向った範頼を助けて平家追討の功を立てたが、義経と頼朝の不和となるに及んで、義経にくみして海路九州に向う時激浪に打ち上げられ一族郎党、支離滅裂にされ、惟栄は捕えられて上野国に流され、その子は許されて大友の家人となり佐伯の荘のみを領する事となった。惟栄の孫惟庸（これつね）が佐伯氏を名乗って佐伯氏の祖となった。

佐伯の本庄百二十町

元寇の役より四年後の弘安八年鎌倉幕府の命により作った豊後国弘安図田帳に――、

佐伯荘　百八十町
本　庄　百二十町
堅田村　六十町

の記載がある。佐伯氏系図、図田帳の豊後国人の記載によると佐伯氏五代と其の弟其の一族が領有していた事が判る、果して本庄百二十町と言うのはどの土地を指すのであろうか。

栂牟礼城の東南現在の古市、脇の平野は当時海であったと考えられるから、本庄は上野を中心としたものではなかったかと考えられる。果して上野を中心として切畑、直見、川原木、中野、因尾、明治の耕地が本庄百二十町であったか否かは記録に明かでない。これを江戸時代中期正保四年に作られた豊後国八郡見稲簿により比較して見ると其の比率は二対一、上野方面は百二十町であった事が判る。之を裏書するものに上野方面の上野供養塔を初め、山王の山王さんの前には稀に見る大きな宝筐印塔があり、又梼原の御坊様の五輪塔があり、宮園から川股に行く左の丘の上には約十七箇の五輪塔がつみ重ねられ、川股庵寺には四個の他或は石垣に或は溝の中にあるのを見る事が事が出来る。川股庵寺から右の方の墓地に向う森の中には、稀に見る大きな五輪塔があり、その附近には多数の五輪塔がつみ重ねられている。このように多数の五輪塔の在る事は武家が多数上野方面に住んでいた証拠ではなかろうか。

上野小倉の供養塔

旧上野村の井崎川に架けられた小又橋を渡ると、左方にある小倉部落の上に山王神社の鳥井が見える。その鳥井の真下の岩には臼杵の深田の石仏と同様に、浮彫された苔蒸した立派な墓が十四基竝んでいる。その左端のものより更に左方には尚幾つかの墓が竝んでいたであろうと想像されるが、今は跡片もなく岩は堀り取られその片鱗さへ止めていない。その右方のものは風雨の侵飾も甚だしいが、左方のものはよく原形を止め、墓の間の磨崖には願文が彫られ嘉歴元年、仝四年、康永四年の年号と共に大願主惟武と書いてあるのもある。嘉吉元年、同四年は共に後醍醐天皇の御代で、康永四年(1345)は御村上天皇の御代であり、惟武は佐伯氏六代惟宗と二従兄に当り、この願文によりこれ等の墓が鎌倉時代から吉野朝時代にかけて、佐伯氏の一族が建立した供養塔である事が知られ、約六百年を経過した今日よく形態を保持し非常に立派なものである所以か判って来る。右方の苔蒸した風雨の侵飾の甚だしいものは、左方のものより更に古い時代のものである事は想像に難くない。

豊後国弘安図田帳に本庄百二十町と書いてあるが、其がどの方面であったか不明であった、然しこの供養塔の存在と地理的関係から、本庄は上野方面であっ事が明らかと成って来た、為に鎌倉時代以後の佐伯の歴史を調べるに当っては、堅田より上野方面に力を入れて研究すべきである。

佐伯氏

鎌倉時代初期から安土桃山時代末期迄約四百年間十四代の長きに渉って、佐伯地方を領有したのは佐伯氏であった。佐伯氏は五代惟直（佐伯弥四郎）に至る迄は記録も明らかでない。承久の乱で佐伯の一族が宇治橋で討死した記事がある位で、元冠の乱の如き国を挙げての戦に、佐伯氏の動きは全く判っていない。

然し弘安八年(1285)豊後の大友頼泰から鎌倉幕府に出した弘安図田帳には佐伯弥四郎が佐伯の本庄百二十町を有していた事が出て来る。吉野朝時代になると六代惟宗、七代惟仲、佐伯山城守惟賢（これかた）等が登場して佐伯氏の動静も大体うかがわれてくる。

室町時代になると周防の大内氏の来冠、栂牟礼（とがむれ）城の合戦、惟治（これはる）等人口にかいしやされているものが多い。

安土桃山時代初期には耳川の戦に十二代惟教、十三代惟真の討死があり（惟教の墓は鶴崎の高田にあり）十四代惟定は十八才で高津の大軍を相手に弧軍連戦連勝して栂牟礼（とがむれ）城を守り秀吉の感状を受ける等の事もあった。この天下に名を誇った英傑惟定も大友の麾下となり朝鮮の役に佐伯勢を率いて従軍していた時、大友義統の失脚に連座して十四代の久しきに渉って領知していた佐伯の地を没収されて、宇和島の藤堂高虎のもとに寄遇する身となった事は哀れであった。

牟礼築城の時期

弘安八年（1285）大友頼泰から鎌倉幕府に出した弘安図田帳を見ると佐伯庄を百八十町とし、内訳本庄百二十町、堅田六十町と書いてある。これから考えると堅田より他に佐伯の本庄はあり、佐伯氏の本家は既に堅田に住んでいなかった事は明らかとなって来る。

佐伯氏が佐伯を領した当初から弘安八年迄、万一佐伯氏の本家が堅田に住んでいたと仮定しても僅かに九十余年であって、図田帳の出された時は既に佐伯氏の本家は堅田に住んでいなかったのであるから、栂牟礼城に住む事になったのは弘安より前と考えねばならない。巷間栂牟礼城は十代惟治（これはる）が築城したのだと言っているが、それは約二百四十年の時代のずれがあり誤り伝えられたものと云ってよい。上野村（現在弥生村）にある供養塔の中には惟武建立の嘉暦元年（1328）のものより古いものが幾つも並んでいる。これは上野方面に佐伯氏の本家が既に住んでいた事を裏書するものである。鳶尾宮（とびのをみや）由来の記事の中に「数代住みなれし城を後に」と書いてある。これも惟治築城でない事を証するものである。或る者は栂牟礼築城を鉄砲の渡来と結びつけているが、豊後国ではポルトガル船が天文十一年（1542）大友宗麟に献上したのが始めであって、随分時代も下って来る。鉄砲の渡来と栂牟礼の築城とは何等関係のないものと云ってよい。

龍護寺

佐伯氏の祖である惟庸（これつね）の祖父に当る緒方三郎惟栄（これよし）は頼朝と義経が不和となった時、義経にくみして九州の軍勢を催すため義経のお供をして海路九州に向う途中暴風にあい、大物ケ浦、住吉の浜に打ち上げられて豊後国は没収され、上野国沼田庄に流されていたが、平家追討の功を訴え漸く許されて本国豊後国に向い、速見郡立石村迄辿り着き乍らその地に急逝して了った。惟栄の家臣山本有明はその死を惜み正治年中（1199―1200）庵を建て菩提を祀ったのが竜護寺の創建である。竜護寺の名は惟栄の祖父大神惟基が祖母嶽の主である大蛇の子であるとの伝説から、竜の子孫の霊を護るとの意味と伝えられている。山号を羽明山と云うのは開山有名をもじったものである。

有明は年老いて失明し、夢に流れの底に金色燃然と光り輝やく観音を見た。有明は之を取り上げて本尊に祀り間もなく眼はあいたと言う。その後寺は荒れるに任され、観音も何れにやら其の所在も判らなかったが、或る時、訪れた僧はその寺跡に毎夜の如く光明が放たれ、そこに青竜のうづくまっているのを見て、その寺跡を掘って見ると、そこに観音の像を得て御堂を建立したと云う。佐伯氏十代惟治もこの観音

を信仰して本堂を建立した。室町時代の衰亡期に作った寺伝に惟治がこの観音を川に投げ棄てたとしているが、投げ棄てたのは毛利高政であって惟治ではなかった。

緒方三郎惟栄

緒方三郎惟栄は惟基の曽孫惟用の三男であった。惟栄の時、平清盛は天下の権を握り天下の諸候は皆清盛に属し、惟栄も又清盛に属していたが、平家も没落する運命となり、使を惟栄の元に遣わした。惟栄は嘗て重盛に属していたが平家の専横を悪むの余り、菊地氏と共に九州に帰り、時勢の至るのを待っていた関係から、国司の命令を院宣と称して九州二島に触れ、平家の九州に落ちて来るのを待った。

平家は惟栄の許に使を遣わし平家に味方せよと話すと惟栄は返事も与えず使を帰し、惟栄は菊地氏等と共に筑後に陣をとり、平家三万の兵と対して諸所に戦い、平家を安住させず、九州から追い出して了った。平家は京都に於ける源氏同志の争いの内に時をかせぎ一ノ谷に城を破られ、四国に逃れ長洲の赤間関に城を築きこれを追った。範頼は九州に渡ろうとして船は無く、糧食なく志気喪した時、惟栄に使を遣し兵船と糧食を惟栄に頼んで来た。惟栄は兄惟隆と共に兵船八十艘と兵糧を準備して範頼を迎え、九州は日を追って源氏の征服する所となった。

然し惟栄の家来に乱暴する者が居て、宇佐宮の宝殿を破り神宝を押奪する者が居て、惟栄は配流の運命となったが、平家追討の功により許されて豊後国に帰る途中、立石に死した佐伯氏の祖である。

堅田の古城趾

堅田には上城（かみじょう）下城（しもじょう）の地名があり宇山城趾がある。上城、下城は王朝時代からの佐伯の主都であるが、佐伯氏になってからも茲に住んでいたと考えられたが、栂牟礼築城が弘安八年前であるから、佐伯氏が最も長く上城、下城に居たと仮定しても九十年位いのもので、九代惟世（こわつぐ）が大内勢と戦った嘉吉元年（1441）頃迄はその分家が住んでいたものと考える事が出来る。上城、下城の名は当然その地勢から名付けられたものと思われ、上城は本城であり、下城はその下屋敷とも考えられる。上城一帯の地形を見ると、その背後に峻険（しゅんけん）な屏風の様な山を背い、当時その前面は海に臨み、丁度背後に鵯越（ひよどりごえ）を構えた一の谷と同じ地形で、佐伯氏も好んでこの地に居城を作ったものと考える事が出来る。下城は昭和廿三年の発掘で一躍先住民族の遺跡として有名になったが、下城貝塚の貝層からは年代を追って支那、朝鮮から輸入の土器の破片が出て来た。この土器の破片から推して考えても下城には昔から相当の人が居住していた事は明らかである。宇山城は

上城、下城の出城と考えられ、其の地形から見ても、その大きさから考えても、本城のあったものとは思われない。宇山城の裏の岡の台から多くの土器が発掘されたが、長良貝塚と地続きであり、宇山城の外廓として居館があり、先住民族が住んで居た土地と出土品から見て思われる。

龍護寺（一）

一、正治年中（1199—1200）山本有明が主君緒方三郎惟栄の菩提のため竜護寺を建立す。後荒廃し、旅僧来りて之を再建せりと言う。本尊に千手観音を安置す。

一、大永四年（1524）栂牟礼（とがむれ）城主十代佐伯惟治（これはる）竜護寺を再建す。

一、大永七年（1527）栂牟礼城落城に当り佐伯惟治竜護寺に一泊す。

一、弘治二年秋（1556）鄭舜功は豊後を発ち帰国する時、大友義鎮は重臣と協議して佐伯庄竜護寺住の清授を正使とし、野津院到明寺住の清超を副使とし同行させ、清授等は琉球を経由して広東に至り、それより舜功とはなれて潮州の海上に至ったとき、弓矢の襲撃により批文を毀滅され遂に獄に下された。

一、天正十三年（1585）十四代佐伯惟定竜護寺裏禅門淵（番匠淵）に伏兵を置き、島津義久の使者玄西堂を始め十八名を斬る。

一、慶長十年（1605）佐伯藩主初代毛利高政竜護寺の観音を養賢寺に移す。命に従わずとて番匠川に投げ入れ、更に数多の手は無用なりとてむしり取る。

一、天和二年（1682）四代毛利高重竜護寺を再建し梵鐘を鋳造す。

一、貞享元年（1684）四代高重の母京都に観音像を修理す。修理を行ないたる仏師の話によると、観音の手の中に「定朝作大神朝臣佐伯惟治再興住持西野浦」の書付があったと言う。

龍護寺（二）

一、元禄十四年（1701）六代毛利高慶百五十人の供を連れ竜護寺に参詣す。

一、宝永年中（1704—1710）家老戸倉外記脇立の不動明王、愛染明王を寄進す。

一、正徳二年（1712）六代毛利高慶竜護寺の観音を尊崇して龕（がん）扉を閉し、夫人宗氏新仏を作る。

一、正徳五年（1715）六月佐伯藩竜護寺に仏餉田（租額十石）を供う

一、正徳五年、従来山伏寺であったこの寺を禅寺とし、魚鳥の山門に入る事、遊山気分にて参詣することを禁じ、開帳の時の警備に従来足軽であったのを小頭を添える事とした。この年観音像を大坂に修理す。

一、享保元年（1716）養賢寺乾堂千手観音略記を作る。
一、安永二年（1772）八代毛利高標母鳥井氏（清寿院）準提観音を寄進す。
一、明治二年（1869）十二代毛利高謙（たかあき）本堂を再建す。
一、昭和十九年（1934）梵鐘応召す。
一、昭和二十六年（1951）創建七百五十年祭を施行す。著者増村竜護寺略記を作る。

酒井富夫著

新刊 国東半島におけるさいの神

新書版総アート紙・写真版四十四図・九十二頁
頒価二〇〇円・〒二〇円

大分市大手町二丁目
販売所 古書専門＝河野書房
電話大分(3)〇七〇七番

県下国東半島各地に散在する「さい神」＝惟神＝を一堂に集め、肩のこらない読物とした著者多年の研究成果。民俗学的にも貴重なもの